

全日本学生選手権団体戦制したのは早稲田と筑波 山本英勝

期待通りの活躍で男女とも連覇。3月11日、愛知インカレ団体戦を制したのは男子は早稲田大学、女子は筑波大学。両校とも個人戦で振るわなかったエースがこの日は最速ラップをたたき出す大活躍、優勝に大きく貢献し、最後のインカレを飾った。男子で二連覇を果たしたのは第14回日光、第15回滋賀で連覇した東大で8年ぶり。早稲田の優勝は通算6回目。筑波女子は三度目の三連覇で通算11回目。



男子選手権 早稲田大学のウイニングラン

早稲田本命の男子

昨年の覇者早稲田は大本命。昨年のメンバー西村、安井、紺野に4年の大塚が加わっていた。前日の個人戦では、安井が優勝、紺野が3位。対抗としては前日4位入賞の許田をエースとした京都、ここ一年で急速に伸びた筑波。また、前日惜しくも準優勝の金澤が引張る東北大、その同学年のライバル加藤を中心とした東大といったところも有力とされていた。

「昨日の結果が良かったので、男子はいいんじゃないか」とスタート前語っていたのは筑波のオフィシャル鈴木康史。一走でその期待に答えたのは二年生、佐々木良宜、トップで2位に1分26秒差でタッチ。二走は「春は全く無名の選手」から「優勝候補にもあがるようになった」と成長してきた小泉成行。

続いてゴールしたのは、京都の大北洋平。この二校、前年の日光では共に一走で出遅れ優勝争いに

最後まで絡むことができなかった。今回は優勝候補筆頭の早稲田に三分近くの差をつけ筑波に続いた。早稲田の完全優勝もあるかもしれないと言われた中、対抗馬二校が先行し、会場が沸いた。

しかし、早稲田一走、西村秀生、全く動じない走り、きっちりと役割をこなす。「始め3ポまでは、筑波と京都と一緒に。そこから隣接のコントロールにひっかかり、筑波と京都においていられる。

「筑波と京都はもう行っちゃっているな、と思っていた」が、焦らず、「後ろの3人が信頼できるので、自分が今出来るレースをしようと思った」という西村はクラシック優勝者の安井に繋げる。

その後を、東大、慶応、東農大、東工大、北大といった入賞を狙う大学が続く。

トップ筑波と約4分半差、2位京都とは3分差。早稲田としては、安井であっさり二位という計算もあったかもしれないが、両校のエースがふんばる。京都は許田がエ

ースの揃う二走の中でも3番目のラップで筑波を抜き去りトップに。筑波の小泉も崩れず、2位でタッチ。結局安井は、トップに立った京都との差は僅か2秒しか縮められない。

この三校に続いて、突然、東北大の金澤がゴール。

一走時点、続々とゴールする中、有力候補として挙げられていた東北大の姿がなかった。東北大は前年の日光でも一走が大発散。アンカー小野田の5人抜きでかるうじて入賞していた。今年も19位と出遅れていたところ、金澤が脅威の15人抜き。一気に4位に躍り出た。

京都大学大活躍

優勝争い、3走スタート時点で京都は前日12位の西尾信寛と4年の西村宏久。一方早稲田は大塚と紺野を残していた。紺野と西尾を比較した場合、5分差を埋めてあまるだけの力の差はあると思われる。筑波も前日21位の野口、

そしてシード選手増田と、可能性を残していた。大塚の走りが勝負のポイントとなってきた。

「ポイントは3走の大塚です。大塚がしっかり走れば」と、早稲田のオフィシャル、兼田。

一方追われる立場の西尾は二年生、プレッシャーの中、力を発揮できるか。

会場がその展開を見守る中、中間を京都が通過の情報。しかし、そのすぐ後に筑波、そして早稲田も通過。そのまま京都リードを守り抜き、アンカー西村に臨みを託す。遅れること、1分17秒筑波、野口ゴール。そして、トップとの差を41秒縮めた早稲田、「大塚良くやった！」の声の中、エース紺野にタッチ。トップとの差は、2分13秒に縮まっていた。

エース紺野混戦制する

大本命と言われた早稲田、京都の快走でもつれた展開になったが、それは、エース紺野のステージ作りのためだったのかもしれない。

「紺野がエースらしいところを見せていないので、紺野が一番活躍できれば、来年にもいい雰囲気がつながる。どんな順位で周ってきても紺野が決めてくれるのが、良い。」

高校のクラブ先輩であり、紺野のオリエンテーリングをはじめるきっかけとなったオフィシャル、兼田の期待通りの走り。最後のインカレ団体戦を紺野は最速ラップで連覇を決めた。

準優勝は最後まで素晴らしい走りの京都大学。早稲田を楽には勝たせなかった。アンカー西村も前半は粘り、紺野とデッドヒートを演じた。「個人個人じゃなく、4人でつないで優勝を狙った」と許田は快進撃を振りかえる。そのエース許田と西尾が残り、来年も期待

できる。「来年は女子と共にアベック優勝を狙いたい」と西尾は表彰台で語った。

三位に入ったのは昨年に引き続き筑波。「レース中は一回たりとも優勝をあきらめることはなかった」という増田は、京都に僅か16秒届かなかった。筑波はこれで3年連続3位。四位は二年生、禅洲拓が一つ順位上げた東北大。5位はエース加藤と、キャプテン石原の頑張りで東大が入る。残る入賞の最後の枠は、前日11位と良い走りをした大嶋真謙が二人抜き、北大が滑りこみ、慶応をかわした。

筑波・東北一騎うち

筑波と東北の一騎うちと言われた今回のインカレ。筑波は、塩田美佐、上松佐知子の2枚看板に3年の二俣みな子。東北はエース小林啓恵に池田和香子、井上アヤ乃。前日の結果では、東北大が2位、6位、7位と大活躍。さらに3人と合計6人も学連枠をとる層の厚さを見せていた。一方の筑波は優勝候補と言われていた塩田が1レグ大発散、5位に終わっている。上松は4位、二俣は19位という結果。この二校が突出し、あとはどこが入賞してもおかしくない状況であった。

一走で飛び出したのは筑波の塩田

美佐。既にスタートフラッグで集団から離れて前を走る。塩田は昨年の日光でも一走を勤めトップゴールを果たしている。

「1走の役割としては無難に帰って来ることはもちろん、差を付けて2走につなげ3走に託すこと」と塩田で先行逃げ切りのオーダーを組んだ筑波はその再現を期待した。

結局、42分40秒のこの日ベストラップでタッチ。広島古澤裕子が2分半ほどの差で2位。池田も快走し、トップとの差は3分弱。東北大池田は10番コントロールまで、塩田の影を見ながら走っていたが、そこから離された。

「ただ自分のレースをしようと思っていた。10Pまで塩田さんが見えてきたりしていた。あとは広島大学の古澤さんと一緒。5Pまではいろいろな大学とパックになっていた。ただ、いつのまにかみんないなくなっていたという感じ。」

エース小林を残す東北大としては、まずまずの展開。

そのあとゴールしてきたのは快心のレースをした二年生、東京女子大の田島聖子。4年生二人を残し、入賞の可能性が膨らむ。その後、静岡、日本女子と続く。入賞を狙う京都勢、京大、京都橘、京都女



orienteering magazine の申込は www.orienteering.com/magazine から！

または〒399-0031 長野県松本市芳川小屋 900-15 木村方

オリエンテーリングマガジン 宛に名前、住所と3000円の定額為替を郵送。さあ、今すぐに！

子、トップから15分以上と大きく出遅れるが、女子の場合、勝負は最後まで分からない。

逃げる筑波、追う東北

二走をトップでタッチした筑波、上松が50分を切るタイム。追う東北大の井上は53分。差を7分26秒にと広げるが、東北大のエース小林と、筑波二俣では微妙な差。両校予想の範疇の展開で最後までもつれる。

この二校に大きく十二分遅れて、三位に東京女子大の大島。タイムは早くないが、まとめた。その後を、千葉、日本女子、慶応が追う。エースを残す静岡、京都、京都橘は7, 8, 9位。9位の京都橘から3位の東京女子まで6分20秒。どれだけ前の4校がふんばれるか。さて、三走トップでスタートした二俣、「プレッシャーはあまりなくて」と淡々と「自分のオリエンテーリングを進める。順当に前半をこなしビジュアルに現れるが、



その僅か3分後、東北大のエース4分を縮めて現れる。まだまだ逆転のチャンスはある。

痛恨のルートミス

しかし、ビジュアルを通過した小林、致命的なミスを犯す。ビジュアル直後のルート選択、山越えと迂回ルートがあったのだが、約1分半ほど遅い山越えのルートを選ん

でしまう。二俣も同じミスをし、このレッグで一分以上詰められているのだが、命拾いした。そのまま、逃げ切り、見事三連覇を果たした。

小林は1分37秒届かず、最後のインカレを終えた。「自分の中では入っていたかなとは思ったんですけど、結果的にはあとちょっとだった」と悔しがる。

3位には前日の覇者番場洋子が5人抜きで京都。4位はエース森田有希子が引張った静岡大学。5位には京都橘の横江君香が入り、4年連続入賞。この三校のアンカーはいずれも、50分を切る期待通りの走り。

残一つの席は、千葉大の佐藤陽子。インカレのリレーでコンスタントに力を発揮する千葉大学、3人とも1時間を切る安定した走りを見せた。

(山本英勝 hidi_o@yahoo.co.jp)



女子選手権
筑波大学のウイニングラン